【研究ノート】

Research note

宮古島市友利元島遺跡出土のジュゴン骨製品

Discovery of Dugong Bone Product At Tomori-motojima site, Miyako-jima city

盛本　勲（沖縄県立埋蔵文化財センター・名古屋大学大学院博士後期課程）

Isao Morimoto (Okinawa Prefectural Archaeological Center, Nagoya University Graduate School Doctoral Program)

＜要　旨＞

本稿は、宮古島市（旧城辺町）友利元島遺跡出土のジュゴン骨製品について、検討するものである。

検討の対象とする標品は、ジュゴンの肋骨を素材としたサイコロ（賽子）の製作途上品である。

当該製品の先行出土例は、これまで宮古諸島や八重山諸島では皆無であるばかりでなく、沖縄諸島のグスク時代遺跡でも今帰仁城跡、勝連城跡、首里城跡等の琉球の三山統一前、さらには統一後の大型グスクで３遺跡７点のみしか知られていない希少な資料である。

一方、検討対象の資料を出土した友利元島遺跡は、これまでの調査結果から、グスク時代～近世に至る集落遺跡として把握されている遺跡であり、グスク遺跡ではない。

よって、当該遺跡から標品が出土したことは、画期的な発見であるとともに、その意義は深いものがあると考える。

小稿は、その意義について、私見を述べるものである。

＜Abstract＞

The purpose of this paper is to discuss a blank of dice made from a dugong rib discovered from Tomori-motojima site in Miyako-jima City (formerly Gusukube Town). This is the first discovery of this kind of products in Miyako and Yaeyama Islands. Even among Gusuku (castle) sites of Okinawa islands, only seven products were found at three major Gusuku sites of pre- and post-unification of three kingdoms (Sanzan), which were Nakijin-jo site, Katsuren-jo site, and Shuri-jo site. On the contrary, Tomori-motojima site was identified as a settlement site of Gusuku period to the early modern period, not a Gusuku site on the basis of recent surveys. Therefore, this discovery from a settlement site is a breakthrough event and has a great significance. This paper presents, my personal opinion regarding its significance.

１．はじめに

概して、グスク時代になると按司と呼ばれる地域の支配者層をはじめとし、一般庶民に至るまで娯楽を嗜まれたらしく、さまざまな遊戯具がグスクおよび同時代の遺跡から出土することはすでに指摘されているところである（上原 2004）。

筆者もジュゴンの考古民族学的研究を進めるなかで、遊戯具の一種としての視点からジュゴンの肋骨製のサイコロ（賽子）に着目し、完成品と製作途上品の集成[1]と、その製作上の技術的検討などを行い、製作のプロセスを明らかにした（盛本 2017）。

小稿で検討する資料は、既報告資料であるが、筆者が丹念に調査、研究を行った結果、ジュゴンの肋骨製サイコロ（賽子）の製作途上品であることが判明した。

標品は、宮古・八重山諸島域では初の出土例であるうえ、沖縄諸島域においても希少であり、その出土は今帰仁城跡、勝連城跡、首里城跡の琉球の三山鼎立時、あるいは統一王朝後の大型グスクのみからの出土である。

このようなことから、一般的な集落遺跡と把握されている友利元島遺跡から出土したことは稀有なことである。

小稿は、当該資料の紹介と標品の出土が宮古諸島域の考古学研究にどのような新知見を与えるか、またその出土意義は何か、などについて、私見を述べるものである。

２．資料の概要

検討の対象とする資料は、沖縄県宮古島市（旧城辺町）友利集落南方の緩傾斜の海岸低地（標高８～38m）に形成されたグスク時代～近世に至る友利元島（むとうずま）遺跡出土品である（図 1）。

当該遺跡の範囲は東西約 500m、南北約 500

図１　友利元島遺跡の位置と周辺遺跡

mの約 2,500 ㎡以上におよぶと推され、南側は太平洋に面し、背後にあたる北西側には標高 30～40mの第四紀起源の琉球石灰岩丘陵台地が形成されている（写真１）。

遺跡の近隣には同時代、同時期の遺跡が多数存在し、遺跡背後の丘陵台地には 14～15 世紀代のグスク時代に位置づけられている友利遺跡が、さらには西方には砂川元島遺跡、新里西元島遺跡、宮国元島遺跡が連なって形成されている（図１）。

砂川元島、新里西元島、宮国元島は、いずれもグスク時代～近世にかけての集落遺跡であり、これらは友利元島遺跡と同時代、同時期に隣接して営まれた集落跡であったことが判明している。

写真１　遺跡近景（西方のイムギャー公園より遺跡を望む）：筆者撮影

遺跡は、個人住宅や宿泊施設建設、県道拡幅工事等に係る諸開発に伴い、計 6 次にわたって調査が行なわれている。

ここで検討する資料は 1995 年度に県道拡幅工事に伴った事前調査によって出土したものである。

出土資料について、報告者は下記のように記すとともに、出土状況および遺物写真を掲載している（下地編 2004）[2)]。

「1．棒状製品：1 部欠損。現存長さ 9.8cm。片端の上部が 1 cm ぐらいを 1.2cm 方形に成形されている。重さ 26.3g。第Ⅲ層の出土。用途不明」

写真２　サイコロ製作途上品（全形・１）：筆者撮影

写真３　サイコロ製作途上品（全形・２）：筆者撮影

写真４　サイコロ製作途上品（細部）：筆者撮影

標品ついて、筆者の観察所見を記すと、素材になっている部分は肋骨の中間部～先端部にかけての箇所である。横断面形状はカマボコ形状をなし、素材の先端部にあたる部分は片方から切り目を入れ、折り取っている（写真２）。

一方、対局する中間部寄りは、幅 5 mm 幅程のノミ状の刃物で削り取り、１辺が 1 ～1.2cm の方形に成形している（写真３・４）。そして、削り取られた面には刃物痕を明瞭に残す。

先行出土例からして、この方形部を徐々に拡大して棒状に製作した後、略 1 ㎝（0.33 寸）長の立方体に切断してサイコロ（賽子）の原形を製作し、最終的に目を入れてサイコロ（賽子）を完成させる製作過程の製品である。

最大長 9.7cm、最大幅 1.7cm、重量 26.2 g を測る。

そして、標品の帰属時期であるが、出土層の第Ⅳ層の主体土器は野城式土器と命名されている（下地 1978 a ・ b）、宮古諸島域のグスク時代開始期の土器群である。

当該土器型式の時期的位置づけとしては、伴出する陶輸入磁器等から、13 世紀末もしくは 14 世紀初～16 世紀中葉頃に位置づけられている。

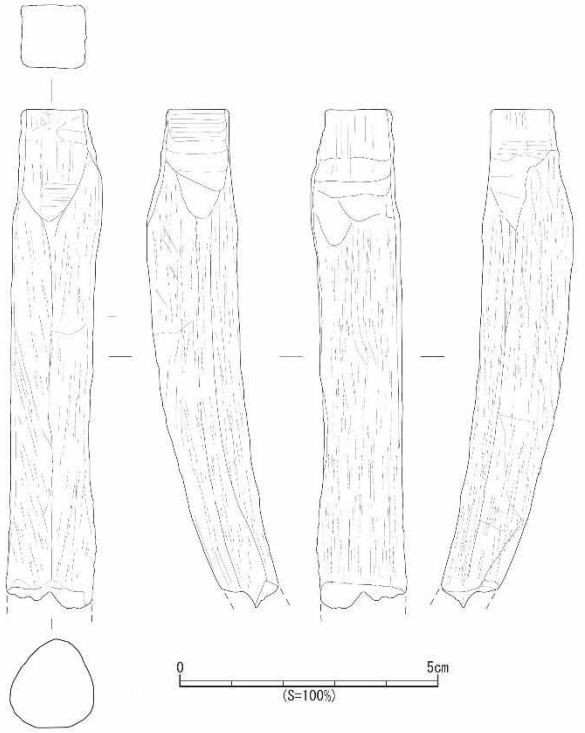

図２　友利元島遺跡出土のジュゴン肋骨製サイコロの製作途上品実測図

このようなことから、標品の時期もこの範囲で捉えて差し支えないものと考える。

そして、この年代観は先行出土例も 15～16 世紀に位置づけられる例がほとんどであることから、年代的な差異はほとんど認められない。

写真５　今帰仁城跡主郭出土のサイコロの製作途上品（全形）：今帰仁村教委提供

写真６　今帰仁城跡主郭出土のサイコロの製作途上品（細部）：今帰仁村教委提供

３．資料の比較検討

ここでは、標品の類似形態の先行例との形態や製作技法等の比較検討を行う。

図３に示したものが先行例のすべてである。

一瞥して明らかなように、標品と瓜二つの類品はない。

強いて言えば、製品の取り方、全体形（加工部の対局の素材の原形など）が類似、もしくは近い形態、製作段階のものは今帰仁城跡主郭出土例（写真５・６、図３－７）や図３－５の首里城跡管理用道路地区出土例であろう。

これら三者のなかでも標品と首里城跡管理用道路両者は製作段階等において、概ね類似するものの、今帰仁城跡は同一でない。

すなわち、何が相異点かと言えば、今帰仁城跡主郭例は立方体製作段階のための細い切断溝を入れているが（写真７）、標品と首里城跡管理用道路地区例には当該切込みがないことから、その一段階もしくは二段階前の工程で終えていることである。

そして、先行例すべてに共通している点は、素材となっているジュゴンの肋骨の緩やかに延びた湾曲部を一辺の長さが略 1 cm になるよう

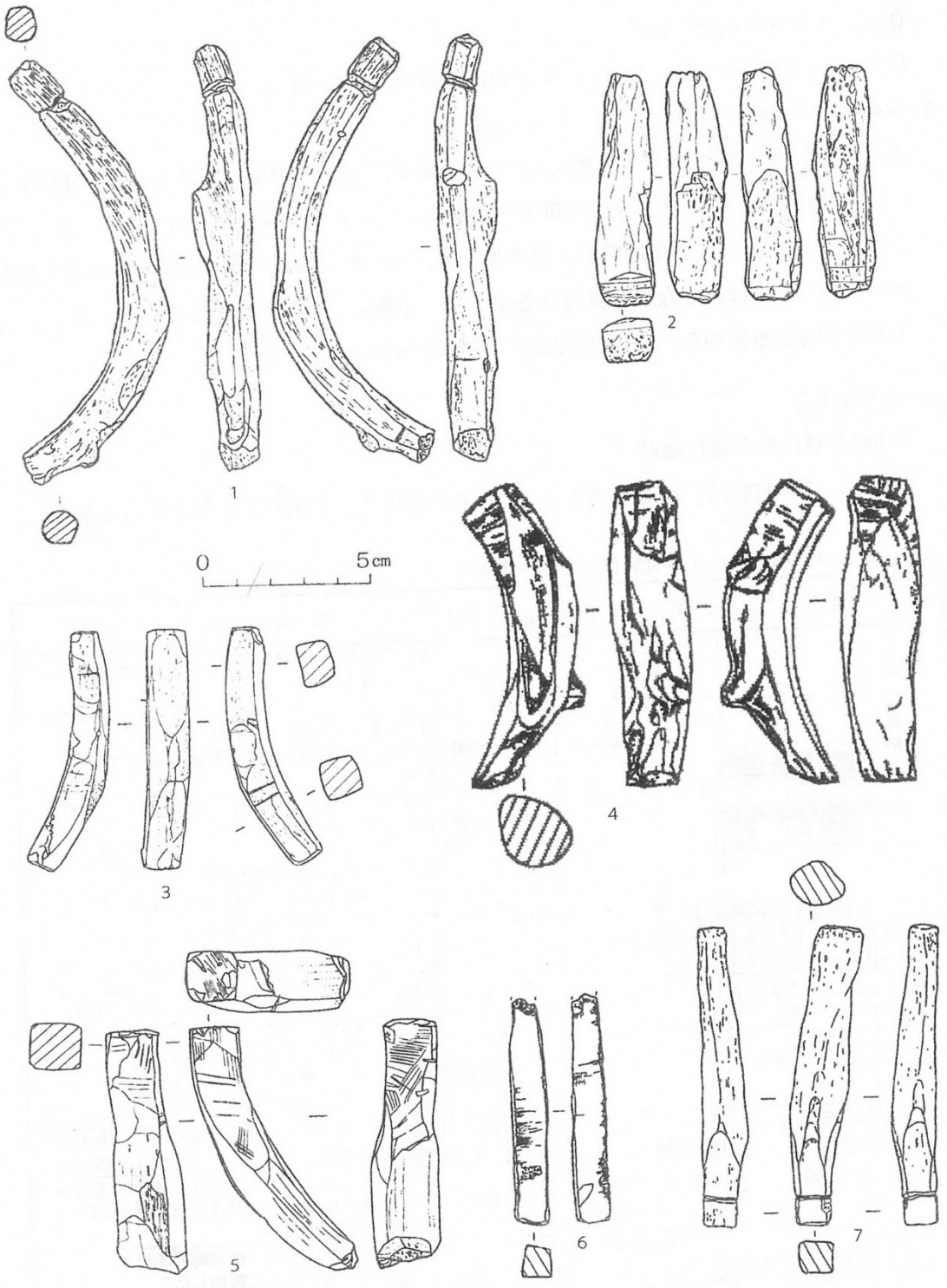

図３　各遺跡出土のジュゴン肋骨製サイコロ製作途上品（盛本 2017 より）　１．勝連城跡四の曲輪北区　２．同東区　３．首里城跡淑順門西区　４．勝連城跡二の郭　５．首里城跡管理用道路地区　６・７．今帰仁城跡主郭

写真７　今帰仁城跡主郭出土のサイコロの製作途上品にみられる切断痕 : 今帰仁村教委提供

に断面四角形に面取りしていることである。

この基本プロセスを経て、勝連城跡四の曲輪北区（第３図１）や今帰仁城跡主郭（第３図７、写真５・６）のように、端から概ね１cm 長に１点ずつ切断してサイコロ（賽子）形に成形して行っているものとみられる。

このように、素材、製作技法等の多方面からの検討結果、サイコロ製作過程上における未成品とみなした。が、しかし、現段階で具体的な製品名は提示できないものの、当然のことながら他の機能、用途を有した製品の可能性をも念頭に入れておかなければならないことは多言を要しないであろう。

４．出土意義

既述したように、類似形態の先行例は、今帰仁城跡主郭、勝連城跡四の曲輪北区・東区、同城跡二の郭、首里城跡淑順門西地区および管理用道路地区である。各々のグスクの出土点数は、勝連城跡３点、今帰仁城跡２点、首里城跡２点と必ずしも多い点数ではない。

これらのグスク群は、いずれも「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として、世界遺産に登録されている遺産群の構成資産となっている大型でかつ拠点的なグスクである。

ちなみに、サイコロ（賽子）の完成品も含めて、2017（平成 17）年での出土点数は７遺跡跡の性格を見た場合、完成品１点出土の港湾遺跡としての性格を有した那覇市渡地村跡と道路跡としての性格を有した同首里真珠道跡以外は、いずれもグスク出土である。

渡地村跡は那覇港入り口に所在し、出土陶磁器等から 14 世紀後半以降貿易港としての那覇港が整備されて以来、王城・首里城と強い関係性を有した強い遺跡である。

２次にわたる発掘調査の結果、中国をはじめとした大量の輸入陶磁器が出土しているが、出土陶磁器の時期および型式学的な諸点から首里城跡出土に酷似するものが少なくないことが判明している（中山・ほか 2007、島・ほか 2012）。

もう一例の首里真珠道跡は、首里王府時代に首里と島尻地方を結ぶ道路として整備された「真珠道」の起点部分よりの出土である。

そして、奄美群島唯一[3]の出土遺跡である奄美市（旧笠利町）所在のウーバルグスクも奄美大島北部一帯では有力按司の居城と伝えられるグスクである。

これまでみてきたように、ジュゴンの肋骨製サイコロ（賽子）は、完成品、製作途上品を問わず、奄美・沖縄諸島の有力按司の居城していたグスクもしくは王城・首里城と関与した遺跡のみからの出土であり、従来において、完形品、製作途上品を含めて宮古・八重山諸島域からの出土は１点も知られていなかった。

このようにみてくると、ジュゴンの肋骨製サイコロの完成品、製作途上品はグスクの中でも有力按司の居城か王城・首里城と関係性のあるとみられる遺跡でしか出土しない、と言っても過言ではない状況にあった。しかし、ここで検討した資料を出土した友利元島遺跡は、グスク等のような支配者の居城とは異なり、換言すれば被支配者である一般民衆の集落遺跡である。

遺跡の立地等、諸点からして農漁村的性格の様相を強く伺がわせる当該遺跡で標品が出土したことは、宮古諸島の考古学研究にとって大きな意義を有するものであろう、と考える。

５．おわりに

わずか１点の出土であるが、標品の出土意義は低くはないものと考える。

標品がグスク遺跡以外で確認されたということは、宮古諸島域のみに限らず、沖縄諸島域、さらには八重山諸島域をも含めて今後の調査の進捗いかんによっては類品の出土の期待が低くなくなった。また、宮古・八重山諸島での完成品としてのサイコロ(賽子)そのものの出土も期待できよう。

述べてきたように、当該製品を見る限り、その加工、製品がグスク遺跡のみではなく、集落遺跡でも行われていたものと考えるが、あるいはそうではなく、グスク遺跡からの流通過程での流入の可能性も念頭に入れておかなければいけないであろう。

一方、標品は概ね同時期とみなされる先行例とは現段階における考古学的年代での前後、あるいは同時性等は不明である。

このため、先後関係が存在するのか、あるいは同時発生かという二択が想定されるが、現段階で特段に説得性のある根拠を有している訳ではないが、諸点から考慮して先行例の沖縄諸島からの製作に係る技術的導入を想定しておきたい。

小稿をまとめるにあたり、下記の諸氏にお世話になった。銘記して謝意を表するしだいである。

久貝弥嗣(宮古島市教委)、下地和宏(宮古郷土史研究会長)、與那嶺俊（今帰仁村教委)、新美倫子(名古屋大学博物館)、山崎真治（沖縄県立博物館・美術館）

また、Abstract の作成にあたっては、田辺博明氏の、標品の実測、トレースに際しては多々良亜矢子、宮城初枝の助力を得た。併せて謝意を表する。

擱筆にあたり、本稿は「名古屋大学大学院情報学研究科博士後期課程学生研究費助成」による成果の一部である。

〈註〉

１）改めて記すまでもないが、ジュゴン（*Dugong dugon*（Müller,1776））の天然分布は、北緯 26°～南緯 27°の浅海域で、わが国での分布は奄美諸島以南である。従って、その集成遺跡も奄美諸島～八重山諸島域であることを付記する。

２）標記のように、本文の記述には「第Ⅲ層の出土」と記されているが、66 頁の出土状況の写真には（第Ⅳ層）と記されている。
発掘担当者に確認したところ、第Ⅲ層は 1771(明和８、乾隆 36)年に石垣島南東沖で発生した地震・津波により、宮古・八重山の両諸島に甚大な被害を与えた大津波(所謂、明和大津波)の被覆層であり、基本的には無遺物層である。そして、遺物自体のナンバーリングにも「友元-A-30- Ⅳ」と記されていることから、本文中の記述は誤植で、出土状況写真に記されている第Ⅳ層（A-30 区-Ⅳ層出土）が正しいとの回答を得た。
また、現存長についても、本文では 9.8cm、66 頁の写真(遺物写真)では 10.0cm と、0.2cm の齟齬があるが、筆者が実測、計測した結果、9.7cm であった。

３）拙稿（盛本 2017）発表後、鹿児島県大島郡喜界町川尻遺跡より 2013（平成 25）年度に完成品（サイコロ）が出土していることを知った。筆者自身、未だ実見の機会を得ていないが、入手したデジタル画像から伺う限り、ジ

ュゴン肋骨を素材とした奄美市笠利ウーバルグスク例ほか、沖縄県内出土の類品と同様であろうことが伺えた。

〈引用及び参考文献〉

上原　静（2004）考古学からみた沖縄諸島の遊戯史　「グスク文化を考える　世界遺産国際シンポジュウム　東アジアの城郭遺跡を通して〉の記録」　新人物往来社　371-400 頁

金武正紀ほか（1991）　第Ⅳ章　人工遺物　第 10 節　⑤不明製品　「今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅱ」　今帰仁村教育委員会　334-335、338-339 頁

島　弘・ほか(2012)　渡地村跡－臨港那覇 1 号線整備に伴う緊急発掘調査報告－　那覇市文化財調査報告書第 46 集　那覇市教育委員会

下地和宏（1978ａ）　野城（ぬぐすく）式土器について　琉大史学　第 10 号　琉球大学史学会　34-49 頁

下地和宏（1978ｂ）宮古の土器文化-その時期区分について-　宮古研究　創刊号　宮古郷土史研究会　47-62 頁

下地和宏・編（2004）第５章　出土遺物　第 7 節　骨製品　「友利元島遺跡－発掘調査報告書－」　城辺町教育委員会　40・66 頁

中山　晋・ほか(2007)　渡地村跡－臨港那覇 1 号線整備に伴う緊急発掘調査報告－　沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 46 集

名嘉山美野ほか（2014）　第Ⅵ章　四の曲輪東区出土遺物　第 15 節　骨製品　「勝連城跡－四の曲輪西区および東区発掘調査報告書－　うるま市教育委員会　203-204 頁

盛本 勲・編(2001)　第Ⅵ章　出土遺物　第 33 節　骨製品等　「首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書－」　沖縄県立埋蔵文化財センター　195-196 頁

盛本　勲（2017）ジュゴンの肋骨製サイコロ－製作上の技術的検討など　沖縄県史料編集紀要　第 40 号　沖縄県教育委員会　45-60 頁